

速報

2018年3月14日

フィンランド・ヘルシンキ / オーストラリア・メルボルン



手話アバターの使用に関する WFD 及び WASLI の声明

(仮訳：全日本ろうあ連盟)

[国際手話版はこちらをクリック](#)

世界ろう連盟(WFD)と世界手話言語通訳者協会(WASLI)の今回の声明は、音声または書記で表現されたコンテンツへのアクセス方法の一つとして手話アバターを使用するときの場面を決定するために、公共機関が運用しようとする手段・方法に関するものです。人間である手話話者の代わりに手話アバターを使用することについて WFD と WASLI が警告する理由は、人間とアバターの言語学的性質の相違にあります。本声明では、手話アバターの適切な使用を決定するためのプロセスを、方法や時期とともにアドバイスすることを狙いとしています。

手話言語は、音声言語とは異なる独自の複雑な構造をもった本格的な言語です。コミュニケーション・ツールなのではありません。したがって、音声言語の単語と手話語彙を 1 対 1 対応させて正確に翻訳することは不可能です。どんな翻訳でも前後関係や文化規範を考慮する必要がありますからです。コンピューターが生成する機械翻訳は、人間の手話言語通訳者のライブ通訳のように文化的に合っている翻訳を実現することができません。

コンピューターが生成する 3 次元アバターは、書記または音声による公開情報を手話言語へ翻訳する、もう一つの機会となる可能性があります。この分野における取り組みは、画質の向上や手話アバターの登場とともに大きく発展しています。テクノロジーが進歩し、手話アバターの使用が広がる可能性が高まっているとはいえ、これらコンピューターの生成物は、訓練された有資格の通訳者や翻訳者がもつ自然な品質とスキルに優るものではありません。手話言語に堪能な個人や有資格者は、手、腕、肩、胴体、頭の動き、顔の表情、口形のパターンを使うだけでなく、メッセージが内含する意図された意味を伝えるのに必要な文化的情報も駆使して、特定の話題に関する情報を表現します。

WFD と WASLI は連帯して、ニュース放送や公共の緊急アナウンス、行政通知など、ろう市民の生活に非常に大きな影響を与える込み入ったライブの情報を伝える際にアバターを使用する場面について、特段の懸念を表明します。

今のところ、機械翻訳は、(音声・手話のどちらにしても) ライブ通訳する人間の能力を模倣するほどにはなっていません。現時点では、手話アバターによる正確なライブ通訳は、不可能です。つまり：

1. 音声言語の単語と手話語彙が直接一致した翻訳は成り立たないことが頻繁にあります。同等の翻訳を実現するには、単語-手話語彙を単に字句的一致させる以上の事柄にかかっています。どんな翻訳や通訳においても、語彙(単語/手話語彙)、文法(構造)、意味論(意味)、話法(言語使用法)の観点でメッセージを伝える方法を検討する必要があります。
2. 翻訳者と通訳者は、対象となる視聴者を考慮しメッセージを十分に理解するために、時間をかけて準備をします。一方、自動翻訳では、メッセージの送り手の意図やメッセー

ジの受け手の目的を保障するために、社会言語的・社会文化的な他の要素をさらに考慮することができません。

3. オンラインの手話言語辞書の収集が今なお行われていますが、(さまざまな社会言語学的カテゴリーに起因する異綴語 variant も含めた) 完全なデジタル化された手話語彙のコーパスにはなっていません。したがって、アバターが手話の文章生成のために利用できるデジタル資源は存在していません。
4. アバターには人間的な要素がなく、より正確な翻訳ができるという誤解がありますが、正確かつ文脈的に意味のある翻訳や通訳は、人間の関与なくして実現することはできません。

私たちは、例えば、ホテルや鉄道駅でチェックインや行列の位置を案内する場面において、事前に記録したお客様向けの固定された情報を流すためにアバターが使用されてもよいと認めます。ただし、手話の文章の妥当性についてろう者がすでにアドバイスしており、かつ、相互対話や「ライブの」手話が要求されない場合に限り、容認します。

手話言語事業に関する WFD の声明の詳しい背景が[こちら](#)にあります。こちらの声明では、手話言語事業はろうのネイティブな手話言語使用者および WFD 正会員のリーダーシップの元で遂行されることが重要であること、また、[国連障害者権利条約](#)が各国政府に、障害のある人たちによる手話言語も含めた自由な自己表現の保証を求めていることに注目するのも重要であると強調しています。WFD は、どんな手話言語事業でも言語コミュニティで使われるさまざまな手話語彙をすべて反映すべきであると考えています。手話言語辞書事業は、ろうコミュニティや地域のろう者が使っているあらゆるさまざまな手話語彙と変種 variation を常に反映しなければなりません。手話言語をドキュメンテーションする際に、一つの単語に一つの手話語彙のみを選別して割り当てることは望ましくありません。したがって、WFD と WASLI はどんな手話言語においても公的な標準化活動を支持しません。ただ、世界中のすべての手話言語の適切な条件による言語学的調査とドキュメンテーションを支持します。

謝辞

WFD および WASLI は、本声明の作成に貢献してくれた下の方々に謝辞を捧げます;
Mr Robert Skinner, Dr Jemina Napier, Ms Maya De Wit, Dr Phil Harper, Dr Debra Russell, Mr Colin Allen の皆さんは貴重な情報を寄せてくれました。Mr Christopher Tester が国際手話に翻訳してくれました。